

わになるガーデン

— 植物栽培を通じた分教室間交流 —

大阪大学医学部附属病院分教室

1 はじめに

本分教室の児童生徒は、腫瘍や白血病などの小児がん、心臓疾患、消化器系疾患や整形外科疾患などの治療のため、入院し治療を受けている。入院期間は1か月未満の比較的短期から、1年以上の長期入院に亘ることもある。児童生徒はその日の病状や体調などを考慮して、教室に登校したり、ベッドサイドで授業を受けたりしている。

本分教室がある大阪大学医学部附属病院の小児医療センター「こどもの森」では、感染症対策が徹底されており、手洗いうがい、手指消毒の徹底をはじめ、植物や土に触れることは難しい。そのため、小学1、2年生の生活の授業で取り組む、植物を栽培する活動ができない。もちろん、今の時代インターネットで検索して、植物の写真画像を観察することはできるが、生き物への親しみをもったり、生命の尊さを実感したりといった、意欲的な活動につなげることは難しいと思われた。そこで、グラウンドがあり植物栽培が可能な大阪精神医療センター分教室（以下、精神分教室）にて植物栽培を行い、成長記録や観察記録を共有するなど、精神分教室の児童との交流を「わになるガーデン」として計画し、実施した。本稿では、植物栽培を通じた分教室間交流について報告する。

2 内容

(1) 種子の観察（本分教室）

種子を密閉袋に入れ、観察シートに沿って観察する。種子には直接触らないように指導し、密閉袋の外側はアルコール消毒しておく。

(2) 栽培のお願い（本分教室）

種子のまき方を学習し、プリントに記入して、栽培のお願いの手紙を書く（図1）。手紙と種子を精神分教室の教員に渡す。

(3) 成長記録の共有（精神分教室）

手紙に沿って種子をまいたり、水やりをしたりする動画や写真を精神分教室の教員や児童生徒が撮影し、Googleドライブにて共有する。それぞれの分教室の児童生徒の個人情報保護のため、動画や写真に児童生徒は映らないように配慮する。

(4) 観察記録の共有（本分教室・精神分教室）

Googleドライブに保存された動画や写真を使い、観察シートに沿って観察し、観察シートの写真をGoogleドライブに保存する。精神分教室の児童生徒が観察したときには、観察記録をGoogleドライブに保存したり、本分教室に教員が届けたりする。

(5) 栽培のお礼（本分教室）

精神分教室の児童生徒や教員が、自分たちに代わって栽培してくれたことに対してお礼の手紙（図2）を書き、Googleドライブに保存する。

(七) ふんぎょうしつのみなさんへ
 いはぐみふんぎょうしつしょうかくふんより
 (七) をまいてください
 たねのとくちよう
 しょうふつのなまえはひげいちそうです。
 いはちがうです。
 おおきさばてのつめくらいます。
 うえかた
 ① ぼうでつちに(みぞ)をつくります。
 ② みぞに(たね)をばらばらとまきます。
 ③ (つち)をかけてておさえます。
 ④ (みづ)をたっふりとあげます。
 ⑤ (みづ)がかわかないようにまいにちみづやりをします。
 Z
 育ててほしい

図1 栽培のお願いの手紙

3 児童の反応

本分教室の児童に、精神分教室で植物を栽培してもらうことを伝えると、「教室の端で育てたらい」「屋上なら育てられるかも」と、植物や土を触ってはいけないことを理解しながらでも、やはり自分たちで育てたいという気持ちが強かった。また精神分教室の児童生徒も自分たちと同じように感染症対策として土や植物を触ってはいけないと思っていたことから、「精神分教室の子どもは土を触っていい

の」と発言した児童もいた。多くの児童が何気なく経験できることでも、本分教室の児童は入院のために生活経験が少なくなっているのだと改めて実感した。

「2内容(2)」の栽培のお願いをしたときには、「いつ花が咲くかな」と成長を楽しみにしており、インターネットの画像では得られないであろう、生き物への親しみの気持ちが見受けられた。後から自分で振り返ることもできるうえ、精神分教室の児童や教員に、本分教室の児童が見ているというメッセージにもなると考え、動画や写真を観察したときの児童の発言はGoogleドライブのコメント機能で記録に残した。また本分教室では、教員と1対1のベッドサイド授業も多いので、コメントを残すことでほかの児童が観察したようすを共有し、共同学習につなげた。

動画や写真を見ると、教員の発言やようすにも興味を示しており、植物の栽培だけにとどまらず、人とかかわりを楽しむこともできたのではないかと思う。入院中は限られた生活環境や人間関係での生活が続くので、動画を通してではあるが、普段かかわりのない人とかかわる機会は貴重なものである。

精神分教室では、学年や学部にとらわれず、多くの児童生徒が本実践にかかわった。直接動画や写真には写らないが、水やりや撮影係を担い、夏休み中に水やりができないので、植物の生育を心配する児童生徒もいたようだ。また精神分教室では今年度、小学5、6年生と中学部の児童生徒が自分たちでクラブ活動を考え、なんと園芸部が発足し、児童2名が積極的に本実践で活動した。精神分教室でも、児童生徒の主体性が育ったといえる。

4 最後に

本実践の発案当初は、テレビ会議システムを用いて、オンライン中継で交流することを計画していた。しかし本分教室が直前に授業変更の可能性が高いため、精神分教室の児童の負担になる懸念があり、実現することができなかった。結果的にGoogleドライブでのデータ共有のみでの交流となったが、両分教室の児童生徒は、主体性が育ち、生命の尊さを実感することができたといえる。来年度以降も交流を続けることになれば、オンライン中継で交流ができるよう、入念に計画しておきたいと思う。

本実践名で使用している「わになる」は元々、精神分教室の児童生徒を児童生徒にかかわる大人が輪になって支えるというキーワードであったが、本実践では「支える」ではなく、植物を通して「つながる」ことができた。離れた場所で入院する、顔も名前も知らない児童生徒が、輪になってつながることで、植物だけでなく豊かな心も育ったのではないかと思う。

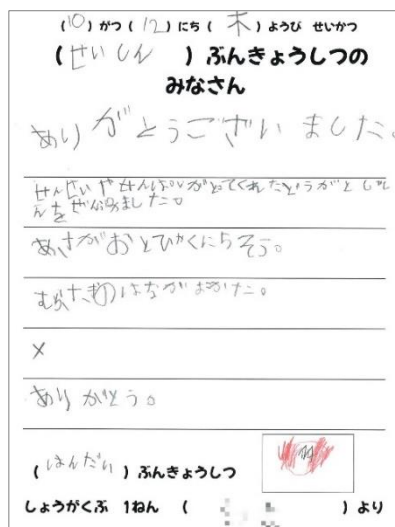


図 2-1 お礼の手紙

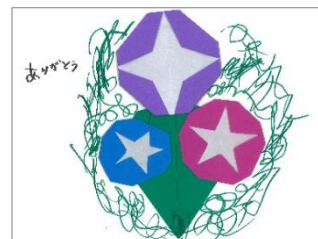


図 2-2 お礼のメッセージ



図 2-3 お礼のメッセージ